

民藝建築と田舎家—近代における民家の贅美—



「河井寛次郎の弟子にあたる陶芸家・上田恒次が、自らの設計により、1937年（昭和12）に建てた自邸。座敷には囲炉裏を設け、建築時に竹林を拓いた際の竹材で天井をつくる。（石川祐一撮影）」

2025年10月18日（土）14:30～17:30

対面開催：京都市京セラ美術館 BIF 講演室

「民藝誕生100年—京都が紡いだ日常の美」が開催中ですので、合わせてご覧ください。

参加費：無料

発表1 石川祐一（京都市文化財保護課）

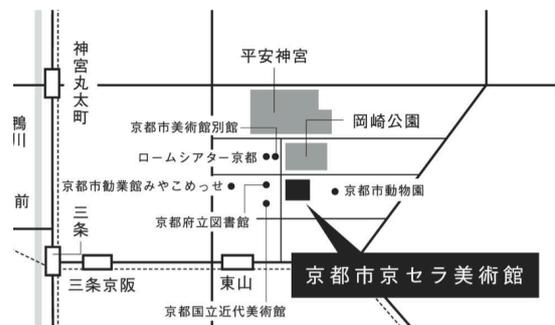
民藝運動の愛でた民家の美

発表2 土屋和男（常葉大学）

黒光りの美学：建築主が田舎家に求めた価値

講評：大橋竜太（東京家政学院大学、イングランド建築史）

日本建築学会近畿支部民家部会では、民家を規範にした建築文化、をテーマに広い視野で研究を行っています。山里の民家で慎ましく美しい暮らしを贅美する文化は、日本では平安時代の源氏物語からみられ、中世には山水画で、戦国期以降には茶の文化で、近世以降には文人文化で、近代には、民藝運動や財界人の田舎家で見られました。民藝運動は、柳宗悦が民衆が日々の生活の中で使う工芸品を贅美したことに始まり、太い木部材と黒い古色仕上げなど伝統的な民家のデザインを取り入れた民藝建築を作ります。なぜわざわざ民家を参考にして、どのような建築をつくったのか、石川先生が発表します。戦前の財界人の間では、山荘の中に民家を移築するなどして楽しむ田舎家の志向がありました。お金持ちがわざわざ貧しい田舎家を自宅に設置する意図はどのような背景があったのでしょうか。これも民藝と通じる価値観でしょう。田舎家について土屋先生が発表します。民藝と田舎家の要素は、実は遠く離れたイングランドの田舎に建てられた建築にも共通する要素があります。イングランド建築史の視点から大橋先生が発表するとともに、お二人の発表の講評を行います。



参加をご希望の方はQRコードからリンクより事前登録をお願いいたします。応募多数の場合、先着順。

<https://forms.gle/rMWx32mSkDz6YcTBA>

主催：日本建築学会近畿支部民家部会
協賛：住総研

お問合せ：坂井禎介（奈良女子大学）

<https://x.gd/woOAK>